

古墳周縁域の交流について

—太平洋側の動向と山形県域の特質—

草野潤平

はじめに

本誌の「調査遺跡の概要」で紹介しているとおり、2012年に実施された東根市八反遺跡^{はつたん}の発掘調査において、平安時代の竪穴住居跡覆土から東北地方3例目(他2例は宮城県)となる子持須恵器が出土した。口縁部を欠く子壺1点であるため詳細な時期比定は難しく、おおむね6世紀代の所産と捉えるよりほかはないが、当該遺物の中心地である西日本から遠く離れた古墳周縁域での出土という事実は注目すべき点である。近隣には小円墳2基からなる村山市河島山古墳群がある程度で、卓越した有力古墳を認めがたく、製作地(窯跡)・供給先(古墳)の問題のみならず、このような特殊な遺物がもたらされた背景について今後検討を深める必要がある。

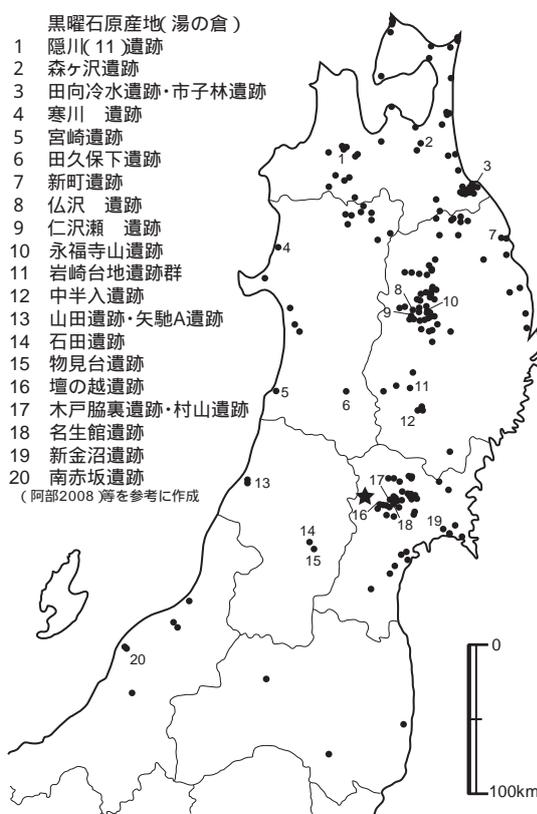
小稿では如上のような課題に取り組むためのひとつの前提として、山形県域を中心とする古墳時代の交流関係について私見を整理しておきたい。

古墳北縁世界における南北交流の東西差

3世紀中葉頃に成立した古墳文化は急速に全国各地へ広がるが、一部例外を除き宮城県大崎平野・山形県山形盆地・庄内平野を北限として、これより北側の青森・岩手・秋田県域では北海道から南下した続縄文文化の強い影響下にある社会が展開する。ただし両文化の境界は一本線で区分できるものではなく、互いの文化を特徴づける考古資料の重層的な分布域が漸進的に変移し、南北双方で複雑に入り込む広範囲の「境界領域」をなしている(藤沢2001・2007)。このことは、続縄文文化を特徴づける遺構・遺物の広がりに着目したとき、八戸市・盛岡市・大崎市周辺を核とする分布の粗密が認められ、北へいくほど濃密になるような単純な分布でないことから窺うことができる(第1図)。また近年では、東北北部にもたらされた古墳文化の遺構・遺物が従来の認識よ

り拡大・増加する傾向にあり、青森県八戸市田向冷水遺跡^{たむかいひやみず}や岩手県奥州市中半入遺跡^{なかはんにゅう}のように古墳文化の遺構・遺物を主体とする拠点的な遺跡が一定数見られることから、東北北部については古墳・続縄文両文化が時間的・地域的に多様なあり方で共存し続けた社会と捉え直す見方も示されている(菊地2012)。このように周縁域としての東北地方の古墳文化にアプローチするうえで、続縄文文化の広域拡散以来生起する東北北部との関係性が極めて重要な視点となることは言うまでもない。

しかし古墳時代併行期における東北地方の南北交流については、日本海側の当該遺跡数が少ないため、太平洋側の考古資料にもとづいて語られることが多い。わずか



第1図 本州島の続縄文文化関連遺跡(古墳時代併行期)

な資料ではあるが、袋状・柱穴状ピットをもつ土坑墓から土師器や鉄器が出土した秋田県能代市寒川^{さむかわ}遺跡・横手市田久保下遺跡や、黒曜石製石器が出土した山形県鶴岡市矢馳^{やばせ}A遺跡・中山町物見台遺跡、続縄文土器が出土した鶴岡市山田遺跡・寒河江市石田遺跡などが挙げられるので、日本海側でも南北交流が展開したこと自体は確かである。これら日本海側の遺跡は、6世紀代を中心とする時期に属するもので太平洋側の盛期とずれがあり、また宮城県加美町壇の越遺跡や岩手県奥州市中半入遺跡のような交流の結節点となる遺跡を認めたいという相違点もあることから、南北交流の内容が東北地方の東西で異なる可能性が指摘されている（菊地前掲）。

以上のような南北交流の状況を念頭に置き、東北北部以外の地域との交流関係から山形県域の動向をおさえることにする。以下、南北交流が活発に展開した5世紀以降を取り上げる。

渡来系文化の流入と展開

5世紀代の東北地方において、カマド付き住居や朝鮮半島系土器、鍛冶関係資料、算盤玉形紡錘車、馬関係資料といった渡来系文物は、福島県中通り地域から仙台・大崎平野へ至る古東山道ルート沿いを中心に分布している（第2図）。そのあり方は遺跡が連続的に繋がるのではなく、福島県郡山市や宮城県仙台市など飛び地的に拠点をおさえ、その拠点を中心に周辺地域に広がりながら北へ進んでいった状況が推察されている（亀田2003）。また北部九州・吉備・畿内といった西日本と比べると量的に少なく変容したものが多く、分布密度が北上するにつれて希薄になることなどから、渡来人1世との直接的な交流というよりは畿内などの中継地を経た再移住と考えられる点が指摘された。すなわち東北進出を目論む畿内政権や関東地方の豪族との関わりのなかで渡来系文化を携えた集団が2次的に入っていったという見解である。このように把握されている大局的な動向を、東北地方における渡来系文化流入の基本的枠組みとして踏まえたうえで、日本海側の山形県域の状況を見てみよう。

5世紀後半～末葉の山形市大之越^{だいのこし}古墳には、鍛冶具の一種である鉄鉗^{かなはし}や初期の剣菱形杏葉、百済ないし加耶地域からの舶載品とみられる特殊な鉄製単鳳環頭大刀（橋本2011）などが副葬され、先進技術者集団を統べ

る新興首長といった被葬者像が想定される。南陽市松沢古墳群では、6世紀初頭前後の渡来系墳墓と目される2基の積石塚^{つみいしづか}が確認されており、とくに2号墳の埋葬施設は合掌形石室の可能性が考えられている。陶質土器としては、伝山形県内出土および新庄市東山グラウンド出土の有蓋高坏（新羅土器）や山形市東金井で出土したと伝えられる有蓋高坏（高霊地域加耶土器）、高畠町源福寺古墳群出土とされる脚付短頸壺（固城地域加耶土器）が挙げられ、いずれも6世紀前半頃に位置づけられる（定森1993・2002・白井2003）。これらの陶質土器は、すべて発掘調査による資料でないため出土状況が不詳であり、明確な位置づけが難しい。とはいえ、土器形態の特殊性から朝鮮半島産とほぼ確実視でき、初期須恵器の可能性が否定できない郡山市南山田1号墳出土の把手付短頸壺や白河市三森遺跡4号住居出土の平底鉢などとは一線を画す資料と言え。また軟質土器では中山町物見台遺跡SD15溝跡で移動式カマドが出土しており、共伴遺物からTK10型式期に位置づけられる。

以上のように山形県域では、庄内地方を除く内陸側に渡来系文物が点在している。これらのうち、唯一5世紀代に遡る大之越古墳例については、鍛冶工房が検出された仙台・郡山市周辺の諸遺跡や初期馬具が出土した角田市吉ノ内1号墳などの存在を勘案し、先述した太平洋側の流入ルートから分派してもたらされた蓋然性が高いと考えている。そのほかの文物（積石塚・陶質土器）については、同種のを太平洋側で見出しがたく、時期も6世紀前半を中心としていることから、古東山道ルートの文化流入とは別の経緯でもたらされたと判断する方が妥当である。新潟県胎内市宮ノ入遺跡で上下交互透孔をもつ新羅系の無蓋高坏が出土している点を考え合わせると、日本海沿岸の物流が関係していると考えられる。そして日本海側において東北北部との交流が盛行するものちょうど同時期である点を踏まえると、両事象が一連の地域的動向である可能性も視野に入れる必要がある。

横穴式石室の伝播にみる地域間交流

続いて古墳時代後期、6世紀以降の交流関係に焦点を当てる。6世紀前半は東北地方全体で古墳築造が低調となる地域が多く、集落遺跡を含めて詳細不明の状況にあるが、6世紀後半以降になると墳墓造営が再び活況を呈

する(菊地 2010)。とくに山形県域の場合、7世紀前半を中心とする時期の遺物が極端に少なく集落の動向を把握しがたいため、ここでは墳墓の特徴から交流関係を探ることとする。南東北における後期古墳の特徴を同一の視点から比較検討するうえでは、山形・宮城・福島³の3県すべてに存在する横穴式石室が最適な材料のひとつと言えるだろう。現時点で把握されている事例による限り、山形県域における横穴式石室墳の出現時期は、いかに遡らせても7世紀前半～中葉よりも古く求めがたいので、先行する6世紀後半～7世紀前半に位置づけられる福島・宮城県域の横穴式石室から検討してみたい。

第一に6世紀後半代の横穴式石室墳が複数営まれた浜通り北部を取り上げる。南相馬市真野20号墳・真野24号墳・横手1号墳・相馬市高松1号墳の4基が挙げられ、いずれも20～30m程度の中小規模の前方後円墳である。真野20号墳は方形プラン石室、真野24号墳はT字形石室、横手1号墳は大形一枚石を壁体とする切石組石室、高松1号墳はL字形石室といったように、一見まとまりのない多面的な様相を呈する(第3図2～5)。しかし真野20号墳の石積みは崩壊が著しく、見方によっては方形プランの石室墓坑に舌状にのびる斜行墓道が接続した地下式構造石室で、崩壊した石積みは石室側壁の構築材と墓坑内に充填された砂礫裏込め材が混ざったものとも捉えられる。この見方が妥当であるとすれば、同様の石室構造は小山市飯塚古墳群を代表例として栃木県南部に多数認められる(鈴木 1994)。真野20号墳石室が墳丘鞍部に位置し、舌状墓道を前方部に向けている点も、栃木県南部における小型前方後円墳の石室構築位置と共通性を見いだせる。墓坑プランの類似という点ではとくにT字形石室の飯塚37号墳(第3図1)の存在が注目され、真野20号墳もT字形ないしそれに近い平面形であった可能性が考えられる。このように理解すれば、片方の袖部の突出が小さいT字形を呈する真野24号墳や、これと左右逆側を大きく突出させる高松1号墳が、真野20号墳と一連のものとして成立したと整理できよう。そして横手1号墳の切石組石室も、壬生町・栃木市吾妻古墳など栃木県南部に類例を求めることができ、浜通り北部と栃木県南部との間で数次にわたる影響関係があったものと結論づけられる。

なお7世紀前半～中葉に位置づけられる国見町森山4

号墳・福島市甲塚1号墳(第3図8・9)などの石室をみると、6世紀後半の栃木県東南部で成立した「組み立て玄門」(大橋 1990・中村 1996)が採り入れられており(第3図6・7)、中通り北部においても栃木県域との交流関係を確認することができる。

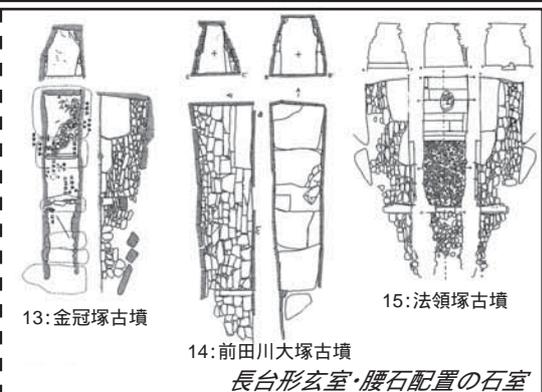
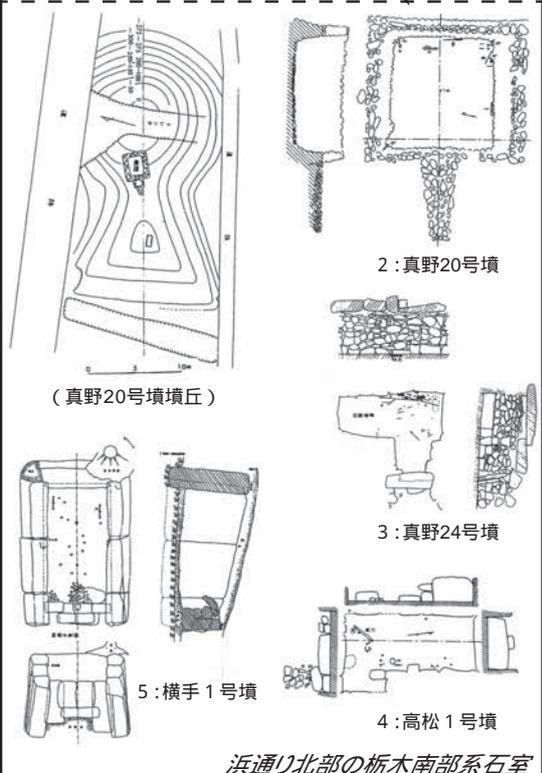
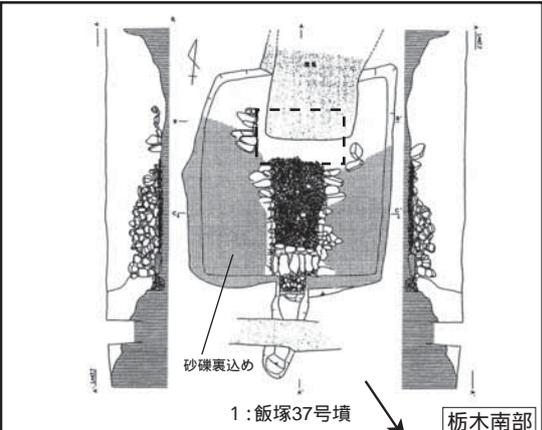
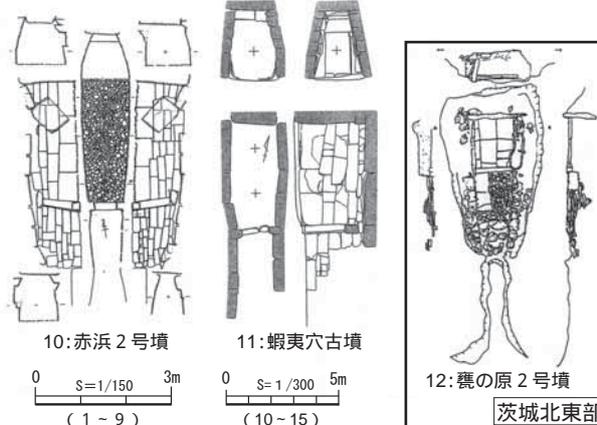
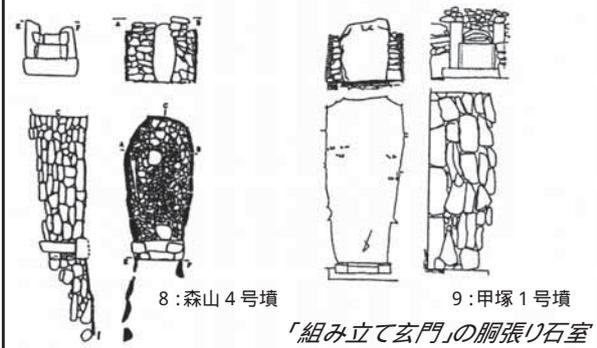
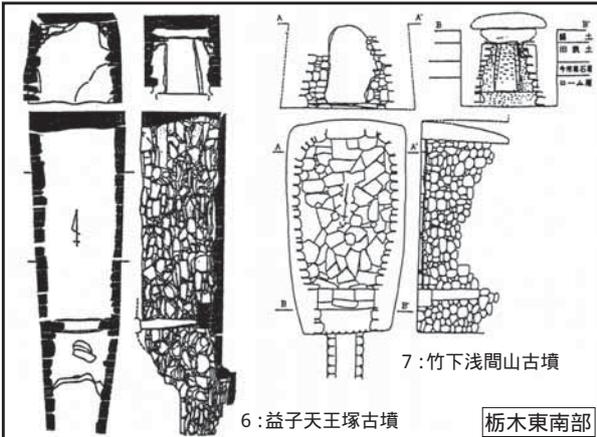
さらに既往の研究でしばしば指摘されてきた点として、浜通り南端に位置するいわき市金冠塚古墳(7世紀初頭:第3図13)と仙台市法領塚古墳(7世紀前半:第3図15)、および日立市甕の原2号墳(6世紀末葉:第3図12)など茨城県北東部に営まれた横穴式石室との近縁性が挙げられる。これらの石室は、長台形の玄室プラン、玄室内の間仕切り石・敷石の設置、玄室奥半の腰石配置などの点で共通し、太平洋沿岸を中心に展開した交流関係として注目されている(古川 1996・横須賀 2007 ほか)。ただし同様の構造的特徴をもつ横穴式石室が中通り南部の須賀川市前田川大塚古墳(6世紀末葉:第3図14)にも採用されており、また上記の石室とは特徴が異なるが、茨城県高萩市赤浜2号墳と須賀川市蝦夷穴古墳(ともに7世紀前半:第3図10・11)のような類似する石室構造の組み合わせも存在するので、太平洋沿岸のみならず古東山道ルートを含む交流関係と理解しておいた方がよいだろう。

このように福島県域を中心とする太平洋側の横穴式石室には、栃木県南部や茨城県北東部との交流関係のなかで成立したと考えられる事例が数多く存在する。これらは5世紀代の渡来系文化流入時に形成された古東山道ルートをベースに発展したものと推察される。

一方山形県の場合、現状で最も古い段階の石室として注目されるのは、2011・2012年に調査が行われた米沢市戸塚山175号墳である。これまでは7世紀第3四半期の土器を伴う高島町羽山古墳や安久津2号墳などが古手の横穴式石室として挙げられていたが(北野 2004 ほか)これらの石室の玄門が立柱石であるのに対して戸塚山175号墳は多段積みで構築しており、より古相を示していると考えられる。そのほか羨道高より玄室高の方が高く前壁を有する点や、玄室四壁を持ち送る点などの特徴も見られ、これら諸属性を兼ね備えた事例となると7世紀中葉前後の福島県域、あるいは栃木・茨城県域には認めがたい。戸塚山175号墳の正式報告が未刊行であるため詳細な論証は別稿に譲りたいが、戸塚

図出典

飯塚37号墳:鈴木一男1999『飯塚古墳群 遺構編』小山市教育委員会
 真野20号墳・24号墳・高松1号墳:福島県1964『福島県史』第6巻 資料編1
 横手1号墳:渡部晴雄1960『横手古墳群第1号墳調査報告書』鹿島町教育委員会
 益子天王塚古墳:大橋泰夫1990『下野における古墳時代後期の動向 横穴式石室の分析を通して』『古代』第89号 早稲田大学考古学会
 竹下浅間山古墳:常川秀夫1976『竹下浅間山古墳』宇都宮市教育委員会
 森山4号墳:目黒吉明ほか1974『森山古墳群第1次調査報告』『国見町の文化財』第3集 国見町教育委員会
 甲塚1号墳:福島市教育委員会1969『福島市史』第6巻 原始・古代・中世資料編
 赤浜2号墳:諸星政得1972『茨城県高萩市赤浜古墳群』常総台地研究会
 蝦夷穴古墳・前田川大塚古墳:福島雅儀1992『陸奥南部における古墳時代の終末』『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集
 礮の原2号墳:佐藤政則1978『日立市六ツヶ塚遺跡発掘調査報告書』日立市教育委員会
 金冠塚古墳:成田克俊・梅宮 茂1960『勿来市金冠塚古墳調査概報』『福島県文化財調査報告書』第8集 福島県教育委員会
 法領塚古墳:氏家和典1972『仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書』仙台市教育委員会



第3図 福島・宮城県域の横穴式石室にみる地域間交流

山 175 号墳石室の類例としては宮城県色麻町色麻古墳群などをわずかに挙げることができる。色麻古墳群の河原石積石室は埼玉県域を中心とする関東中西部の石室構造に近似し、東北進出を目指す畿内政権の要請を受けて関東地方から移住した軍事的集団の墳墓とみる見解が提示されている（福島 1992 ほか）。戸塚山古墳群における横穴式石室の出現も同様の背景によるものと捉え、先に見た有力首長間の交流を示す福島・栃木・茨城県域の動向とは区別した方がよいだろう。筆者は以前、米沢盆地では先行首長墓を在地民編成の要として利用する戸塚山古墳群のあり方（土生田 2010）や、在地固有の論理にもとづいて前期以来脈々と造墓活動が展開した川西町下小松古墳群の様相など、在地性を温存するかたちで地方経営が進められた状況が窺える点を指摘したが（草野 2011）この在地性の強さゆえ、太平洋側の古墳北限域と同様の東北経営策がとられたのではなからうか。

おわりに

小稿で確認したのは渡来系文物と横穴式石室という一部の文化要素に過ぎないが、どちらも太平洋側と異なる交流関係の展開が窺えた。5 世紀後半の山形盆地の古墳には太平洋側と共通する様相が認められるので、東西差をもって展開する 6 世紀以降の交流関係はひとつの変革的事象として評価することができよう。同じく 6 世紀代に比定される八反遺跡出土の子持須恵器も、こうした新たな交流関係の一端を示す資料なのかもしれない。

参考文献

- 阿部義平編 2008 「[特定研究] 北部日本における文化交流 続縄文期寒川遺跡・木戸脇裏遺跡・森ヶ沢遺跡発掘調査報告 上・下」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 143 集・第 144 集 国立歴史民俗博物館
- 大橋泰夫 1990 「下野における古墳時代後期の動向 横穴式石室の分析を通して」『古代』第 89 号 早稲田大学考古学会
- 亀田修一 2003 「陸奥の渡来人（予察）」『古墳時代東国における渡来系文化の受容と展開』平成 12 年度～平成 14 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））研究成果報告書 専修大学文学部
- 菊地芳朗 2010 『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大

学出版会

- 菊地芳朗 2012 「東北」土生田純之・亀田修一編『古墳時代研究の現状と課題』上 同成社
- 北野博司 2004 「古代国家成り立ちにおける出羽内陸部への王権支配 置賜地域の横穴式石室墳」『歴史遺産研究』No.2 東北芸術工科大学歴史遺産学科
- 草野潤平 2011 「山形県における中期・後期古墳群の特質」『やまがたの古墳時代 最上川流域のムラと古墳』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 定森秀夫 1993 「東北地方出土の陶質土器 日本列島における朝鮮半島系遺物の研究」『朱雀』第 6 集 京都文化博物館
- 定森秀夫 2002 「日本列島出土の高霊タイプ系・固城タイプ系陶質土器」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』国立歴史民俗博物館
- 白井克也 2003 「日本における高霊地域加耶土器の出土傾向 日韓古墳編年の並行関係と暦年代」『熊本古墳研究』創刊号 熊本古墳研究会
- 鈴木一男 1994 「砂礫裏込の横穴式石室 栃木県南部にみられる石室裏込の一致相」『小山市立博物館紀要』第 4 号 小山市立博物館
- 中村享史 1996 「鬼怒川東岸域の横穴式石室」『研究紀要』第 4 号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 橋本英将 2011 「大之越古墳出土の環頭大刀について」『出羽国成立以前の山形 山形と東北大学所蔵重要考古資料』山形県立博物館
- 土生田純之 2010 「始祖墓としての古墳」『古文化談叢』第 65 集 九州古文化研究会
- 福島雅儀 1992 「陸奥南部における古墳時代の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 44 集
- 藤沢 敦 2001 「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』第 48 巻第 3 号 考古学研究会
- 藤沢 敦 2007 「倭と蝦夷と律令国家 考古学的文化の変移と国家・民族の境界」『史林』第 90 巻 1 号 史学研究会
- 古川一明 1996 「北辺に分布する横穴墓について」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会
- 横須賀倫達 2007 「勿来金冠塚古墳出土遺物の調査 装身具類・土器類・武器類（追加）と古墳の評価」『福島県立博物館紀要』第 21 号 福島県立博物館